## 福原 野乃花

大阪芸術大学短期大学部
メディア・芸術学科　映像コース
2022年卒業

大学卒業後、病院に通いながら強迫症の治療に専念。2022年8月に自身の経験をもとにしたシナリオを書き始める。その後、短大時代の同級生に協力を募り、自主制作映画「悠優の君へ」の制作を始める。
現在はSNSを通して強迫症についての発信を行いながら、脚本家を目指し執筆活動を行なっている。
YouTubeチャンネル「ののはらちゃんねる」にて動画も投稿中。

# 卒業後、短大時代の仲間とともに自主制作映画に挑戦

高校時代、強迫症の症状に苦しんでいた私には将来に対する希望が全くありませんでした。3年生になり、進路を決める時期が来ても、私は毎日を生きるだけで精一杯で、どこに進むかなんて考える余裕も元気もありませんでした。それでも現実は待ってくれなくて、私はどこかに進まなければいけなくて。毎日たくさんの大学について調べていました。私にとって大学進学は自分に与える最後の猶予でした。社会に出る前に病気を治す最後のチャンス。でも大学に行くにはお金がかかる。そこで私は決めました。「自分の好きなことを学ぼう」。自分の好きなこととはなんだろうか。そう考えたときに浮かんだのが、幼い頃から親しみのあった映画の存在でした。映像制作について学べて、学費をできるだけ抑えられて、なんとか通い続けるために短大で、映像以外に興味のあることも学べる大学。そこで見つけたのが大阪芸術大学短期大学部でした。私にとって短大はたくさん考え抜いた先に見つけたベストな選択でした。

2回生になってから、私は恩師に出会いました。三原光尋先生です。実は私の母が三原先生の監督作品である「しあわせのかおり」の大ファンで、DVDも持っており、幼い頃から何度も一緒に見ていました。なので三原先生と出会った時は本当に驚きました。在学中、まだ強迫症の症状がひどかった私は思うように作品作りに取り組むことができず、卒業後もその後悔は残りました。病院に通い始めてからも症状はなかなかよくならず、鬱蒼とした日々を過ごす中で唯一の光となったのが執筆作業でした。それまでは自分が物語を書くなんて想像もしていませんでしたが、友人から「今の気持ちでしか書けないことがあるんじゃないか」と勧められ書き始めた脚本。誰にも話したことのなかった自身の高校時代のことを物語にしていくうちに、昔の自分が救われていくような感覚がありました。出来上がった脚本をまず見ていただきたいと思ったのが三原先生でした。先生にアドバイスを頂きながら、短大時代の同級生たちに声をかけて仲間を募り、映画「悠優の君へ」の制作が始まりました。思うようにできなかった学生時代でしたが、卒業してから、自分のしてきた選択の先で出会ったたくさんの人たちとこうして一緒に作品作りをすることができて、出会いや縁の大切さを実感しました。短大に通ってよかったと心から思います。

クランクアップ時の様子

映画のワンシーン

ののはらちゃんねるにて映画の予告動画を公開中です。

推薦者／大阪芸術大学短期大学部
メディア・芸術学科教授
三原 光尋